

技報第12号発刊にあたり



執行役員 技術本部長

千々岩 伸佐久

電動化や自動運転など100年に一度と言われる大きな変革期を迎えている自動車業界ですが、近ごろは急速な電動化への逆風が強まっているのも事実です。それでも大きな変革の流れは変わっておらず、様々な状況を俯瞰して技術開発の方向を見誤らないことが大切です。そのような中、新しい技術開発の拠点を開設する会社を良く目にします。特にこれまで内燃機関車の技術を中核としてきた企業がCASE技術や全く異なる分野の開発拠点を開設されたというニュースに触れると、会社が存続するには時代の変化に合わせた新たな技術を取り入れていくことが不可欠なのだ実感します。

また同じく昨今、多くの自動車メーカーでコンプライアンス違反が相次いで発覚し、大きな社会問題となりました。特に車両型式の認証試験に関する不正は、確実な基幹技術を以て法律に準じる真摯な姿勢が問われた問題であり、指定自動車を生産する我々も法令遵守の大切さを改めて認識した出来事でした。ここで極東開発工業の基幹技術は「特装技術」として長年培ってきたものですが、この成熟を支えた多くの先人が会社を離れた今、これを後世に伝承し発展させていくことは大変重要です。

このような中、我々は2026年の開所を目指し技術開発の拠点となる「極東開発グループテクニカルセンター」の建設を進めています。完成した暁には当技報

でもご紹介しますが、実験設備と開発人員を集結させることで新たな技術開発を加速し、合わせて基幹技術の確実なブラッシュアップを目指します。またこのテクニカルセンターでは、極東開発グループ全体の開発力を高めるシナジー効果も期待しており、創業以来社是として紡がれた「和協」の精神に沿って、様々な製品に関わる技術者同士が活発に交流できる環境づくりを推進していきます。

さて、今回お届けする技報第12号では冒頭コンクリートミキサー車の巨大なドラムを回す減速機の技術についてご紹介しています。これは兵庫県の三木工場にある機械センターにて1981年から積み重ねてきた技術であり、板金・組立が基本技術である社内には、このような機械加工技術を持ち合わせていることは、先ほどのシナジー効果を引き出す上でも大きな強みとなります。そして巻末には特装車の花形である大型ダンプトラックの歴史を綴った「温故知新」を掲載しています。ダンプトラックは極東開発工業のルーツとなる製品で、その70年に渡る歴史は戦後から高度成長期を経て持続可能な社会を目指す現代に至るまでの世情を反映しており興味深い内容となっています。当技報は基幹技術を後世に伝承する取り組みの一環でもあります。是非ご一読の上、極東開発グループの技術の一端を感じて頂ければ幸いです。